

昭和54年度 上半期の児童図書

最近のジュニア文学



●図書館コーナー●

「グローバーくん」（ベラ、ビル・クリーバ共著 富山房）

十一才の男の子グローバーくんにとって、母親の自殺は、あまりにもショッキングな事件だった。誰も寄せつけず、ひとり悲しみにひたりきっている。父親の姿をみて、グローバーくんは、父親のようになるまいと思う。泣きわめいたってなんにもなりはしないのだから。グローバーくんは、死というものを考え、耐えるということを学ぶ。グローバーくんの目を通して、人間が成長してゆくために必要な、人生の現実と試練を描いている。

「カレンの日記」（ジュディ・ブルーム著 僧成社）

トゲトゲしい言葉がとびかう夕食、両親がそろうと、とたんに一触即発のピリピリした空気。カレンの家庭は、いつからこんな風になってしまったのだろうか。両親の離婚は、もはやさけら

れない現実のようだが、カレンは、それでも自分の努力次第で、その危機をまぬがれるのではないかと、空しい努力を重ねる。両親の離婚に直面した子どもの不安と悩みを、一少女の視点から描いた作品である。

「魔女の猫ウオーム」（Z・K・スナイダー著 富山房）

「母親のようにはみえない」若く美しい人の母親を持つ十二歳のジェシカは、いつもひとりばっちり。母親はボーランドとのデートに忙しく、ジェシカは夕食でさえ、インスタント食品をひとりで食べることが多い。ある雨の日、ジェシカはコネコをひろう。ぬれそぼれた醜いコネコの中に、自分の姿みたジェシカは、自己の怒り、疎外感、復しゆうなどを、コネコの呪いのせいにし、自分の行動を正当化する。

「愛について」（ワジム・フロロフ著 僧成社）

著 岩波書店

十四才のサーシャのまわりには、男子の友達のほかに、少々おせつかいな同級生のオリガ、サーシャが秘かにあこがれている優等生で美人のナターシヤ、グラマーで挑発的なレンカがいる。そしてサーシャは、「ぼくたちが、あらゆることを知る必要はないし、気の合つた相手とやたらにくちづけをはじめなければならないはずはない」と考えなければならぬ。が、それでも、やはり大人たちが「もっと何度も、事をわけた説明をしてくれたら、ぼくたちもばかなまねをしないですむかも知れない」と思つてもどしに行き、同じ劇団の男優と母親との抱擁をかい間みて、そこに父親との間にはみられなかつた母親の姿を見出しだまつて引返す。

ここに紹介した海外の四冊のジュニア文学は、子供時代と大人へのはさまに立つた子供たちの姿を、現代社会の現象とからませながら、浮き彫りにしている。

近年のジュニア文学は、以前とは大部おもむきが変わつてきている。以前も同じように、さまざまに型で人生への追求がなされてきたが、それは、あくまで、子供同士の葛藤の中で描かれており、大人の役割はワキ役で、子供対大人としての取り上げ方はされなかつたようだ。また、死や離婚や性の問題を正面切つて児童文学の中に持ちこむことはされなかつた。現代の児童文学の中にはこのような問題がメイン

テーマとして取り上げられることは、今日の社会が、子供と大人の世界が以前より、より密着度が高くなつてきていることの表れであろう。

子供の読み物は、楽しくあるべきだと思う。生きることへの希望を強く打ち出したものがふさわしく、人生の暗い面、人間生活のドロドロした面は、幼い子供には好ましくないのはたしかである。

しかし、ある年齢に達した子供——大人の世界の入口にさしかかった年齢の子供——には、人間社会の影の部分も、ときには描きだしてみせることが必要ではないだろうか。死、孤独、両親の離婚、性などに直面した子供たちが、自力で、あるいは周囲の理解ある大人に見守られながら、生きることへ意味を探り、アイデンティティを追求してゆくプロセスを、文学の中から学ぶことは、現代の子供たちにとってたいせつなことと思う。

今日「愛について」のサーシャ同様、大人が、何事も「事をわけて説明してくれたなら、バカなまねをしなくともすむ」と思つて子供たちはたくさんいるだろう。若い読者が、これらの文学から学ぶことは非常に大きい。

しかし残念ながら、今日の十代の人たちは、だんだん読書から遠ざかつて行く。

今日も、これらのすばらしい本は、借り手のないまま、図書館の書棚に若く、